

をしてみせるという行動になってしまっていると思われるが、直接そのことにふれなくて絵本や関わりを通して接し方を学んでほしいと考え、絵本の読み聞かせと教師や友だちとのやりとりを大切にすることに心がけた。しだいに友だちの発表にも少しずつ耳を傾けるようになり、そのことで友だちとどうかかわればいいのか、友だちのことを考えて行動できるようにもなっていった。発表がうまくできなかった時には教師に対しても素直なことばで「だって恥ずかしいから」などと言えるようになってきた。

2学期に入り、ベトナムやオーストラリアの人への自己紹介では、照れながらも自信をもって英語で話すI男の姿が見られるようになり、少しずつ彼の目標をクリアしていることをうれしく思っている。

#### (5) 考察

「自己紹介」を繰り返す中で生徒たちは、自分の名前・住所・電話番号・家族を改めて意識して話したり書いたりする経験をし、覚えることができた。それが必要な場を設定し、それを繰り返すことではじめて自分のこととして意識することにつながったのではないかと思う。場の設定と繰り返しの大切さを実感することができた。

また「自己紹介」では必ず発表の場を設けた。みんなの前で声に出して自分のことを発表し、それを聞いてくれる人がいるということで「相手に伝わった」ことを実感し、共有できた喜びにもつながったと思われる。学校生活の文脈の中で出会ったお客さんに実際に「自己紹介」を経験することで彼らは回を追うごとに自信をもって発表するようになっていったのである。

生徒達は「自己紹介」を通して自分の思いが伝わった喜びを感じたり、相手をわかり合ったりすることができた。そのことで授業に積極的になり、自信をもって発表したり、友だちやお客さんのことをもっと知りたがったり、友だちとかかわりあったりする姿がよくみられるようになってきた。その姿は教科の学習だけにとどまらず、学校生活全般でもみられるようになっており、生活の文脈の中でつながり合い、かかわり合って育ってきていると思われる。今後も彼らの生活の文脈の中で学び合い、育ち合っていきたいと考えている。

(近藤明子)

### 事例 4 国語「かべ新聞作り」

#### (1) 生徒の実態

このグループの生徒達は興味があることについて会話を楽しんだり、絵や文字にあらわすのが好きである。また、本や雑誌、新聞、地図などから好きなことを見つけてくる生徒が多い。興味のあることについて教師や友だちに話しかけたり、書くことが好きな反面、会話が一方的でまとまっていなかったり、書いたことについて説明できなかったりする。このように相手に言いたいことが伝わらず、教師も受けとめて返してあげられない場合も多い。

## (2) 教材観

個人のめあてを考えたときに保護者や担任から「自分の気持ちを文章に表すことができるようになって欲しい」という希望が多かった。自分の気持ちを伝える力は生きていく上で大切な力であり、自分の気持ちを知ってもらい、そのことをみんなと共有できたり、反応が返ってくる満足感や心地よさを味わって欲しいと考えた。

かべ新聞作りではいろいろなテーマをもとに自分の思っていること、体験したことを発表することができる。発表することで自分の考えを伝えようと意欲的に文章を書いたり、人前で話したりする気持ちが育つ。文章だけでなく絵や写真を使って表す方法もあわせて学習できると考えた。

また、本や雑誌、新聞や地図、インターネットなどからテーマにそって調べものをすることで情報を得る方法を身につけたり、新しい情報から自分の世界を広げていって欲しいと考えた。

## (3) わかる状況づくり

以下のようにかべ新聞作りの流れをくり返すことで学習に対して見通しをもち、取り組みやすいように配慮した。

- |              |             |            |
|--------------|-------------|------------|
| a. 記事の内容を決める | b. 記事を書く    | c. 記事を見直す  |
| d. 記事を模造紙に貼る | e. 発表の練習をする | f. 記事を発表する |

### ①何を書くか明確にする

- ア. 国語の教科書に載っているかべ新聞を見本にして、かべ新聞とはどんなものか、どのようなことを書くか学習した。
- イ. 写真を貼った完成した形の記事見本、穴埋め形式の記事見本などを用意し、まねをして書けるようにした。また、記事についての資料や写真を見ながら書けるようにした。
- ウ. 記事の担当についてはいくつか選択肢を準備して生徒が自分で選ぶようにした。選択肢についてはあらかじめ生徒との会話から得た情報をもとにしたり、学校行事で体験したことなどから集めた。生徒が書きたいと思うことや書きやすいことを選択肢の中に入れるように配慮した。

### ②記事の伝え方を一緒に考える

- ア. 記事を書くときには生徒と教師が机を寄せ合って座った。教師は記事について話しかけてくる生徒に応え、テーマに対する生徒の気持ちを引き出すようにした。また、生徒同士もお互いの気持ちを自由に交換しながら考えをまとめ、文章に書きやすくした。
- イ. 記事は一度書いたものを読み返したり、資料の切り抜きと比較したり、教師と一緒に書き直したり、書き足したりした。このときに、生徒の気持ちや考えを尊重し、「ここはこういうことを言いたいんだね」「こう書けば読みやすいからみんな読んでくれるよ」と話し合いながら誤字脱字を直すようにした。また、辞書の引き方も教えて自分で納得して直せるように心がけた。

ウ、昼休みに行われるかべ新聞の発表にそなえて練習をした。質問に答えたり、友だちの発表を聞いたりして発表に慣れ、自信がもてるように配慮した。

#### (4) 指導の実際

A子は中学部2年生で、1年の時と比べると学校生活に慣れ、徐々に自分から教師に対して話しかける機会が増えてきている生徒である。授業や活動に対して積極的で、自分なりのこだわりがあるもののお手伝いを頼むとよく引き受けてくれる。また、去年から学部全体でお手紙ブームがあり、彼女も手紙を書く楽しみやもらう楽しみを味わうことができた。

しかし、彼女が書く文はまだ短く、気持ちも「たのしかった」「おもしろかった」で表すことがほとんどである。また、習った漢字を使わずに平仮名で書くことが多い。かべ新聞作りでより伝えやすくするために習った漢字を使ったり、いろいろな文章の書き方や文字以外での表現の仕方を育てられればと考えた。

##### ①友だちからヒントを得る A子

かべ新聞の第1号に彼女が書いたのはサイクリングに出かけたことだった。彼女は中学部に来てから補助なしの自転車を練習して乗れるようになっている。2年になってから自転車で近くの公園へ散歩に行ったり、中学部行事として犀川の川べりで気持ちよくサイクリングできて嬉しかったのではと思われた。また、サイクリングの行事が一番記憶に新しくあったのでそれを書くことにしたと思われる。

記事を書くときにサイクリングの日時や場所、参加した人、そして最後に自分の感想などを書くように書き方の見本を提示して説明した。また、サイクリングの時の写真も手がかりにしたり、かべ新聞に貼ると良いと思って用意した。すると彼女は書く内容をすぐに理解して書き始めたが感想のところで手がとまっていた。自分で自由に書くのはA子にとってはまだまだ難しいのだろうかとしばらく他の生徒と学習しながら待っていた。

サイクリングのあった時期は1年生のU男が長期欠席していた。そのことについてI男が「U男君は残念ながら出席できませんでした」と自分の記事に書き込んでいた。それを聞いたA子は「はっ」として、自分も同じことを書いていいかと教師に尋ね、書き足していた。彼女はそれを書いて満足そうに読み返し、すっきりした表情になった。

その後、「写真を見て思い出してみて」というと写真に写っている人の名前を書きだした。ただ、その数は増えていき、写ってない生徒の名前まで紙面いっぱい書き込まれていった。普段、友だちへ自分からはかかわらない彼女だが中学部の友だちの名前はフルネームでしっかり記憶していることがわかった。

##### ②自信をもって発表する A子

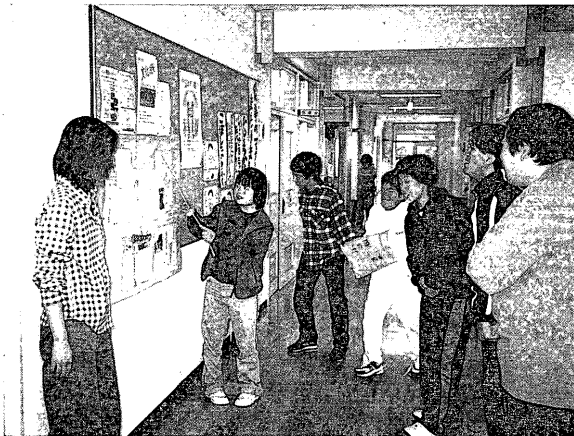
かべ新聞の2号はベトナム特集号にした。本校の姉妹校であるベトナムのタンマウ障害児学校の教師とこの学校に通う子どもの家族が訪問することになったのを機会に取り組むことにした。A子は外国語(英語)に興味をもっていたり、ベトナムのことも関心をもっているのでぴったりの学習だと思われた。

ベトナムのことをインターネットで調べたり、本で読んだりしたあとに、実際に何かべ

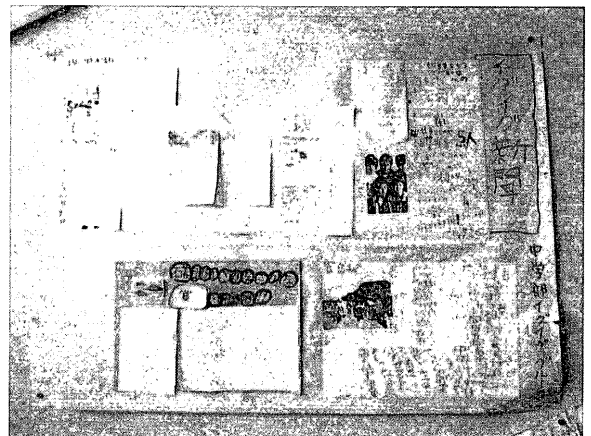
トナムの物に触れてみたいと思った。そこでベトナムの民族衣装を着たり、楽器を鳴らしたり、「フォー」、「生春巻き」を作って食べてみることにした。レシピについてはA子が好きな本に特集で載っており、調理自体も好きなのでライスペーパーの戻し方をしっかり覚えたり、「フォーやライスペーパーが米からできている」ことを理解できた。また、それを短い言葉と写真ですぐ記事にすることができた。

ベトナム特集号では生徒たち同士でデジタルカメラを使い、たくさん写真を撮った。それを彼女に見せると好きな写真を選び、たくさん切り貼りをした。もう、記事作りのパターンがのみこめたのか手がとまることなく短時間で記事を仕上げることができた。たくさん写真があることで長い文で説明することが要らず、片仮名なら彼女もスムーズに書けるので誤字脱字もほとんどなかった。

また、昼休み、集まった人の前での発表では写真を指さしながら大きな声で自信をもって説明することができた。「フォーって何?」と聞かれ「ベトナムのうどん」と返答することもできた。実際に調理したことで自信がもてたのではないかと思った。



自分の記事について発表する



かべ新聞1号

#### (5) 考察

A子の学習していく様子を観察していると、あらためて教科の学習というのは学校生活全般を軸にすすめていくことが大切なのではないか、と思った。A子を含め子どもたちは教科学習だけでなく、教科とその他の学習が生活の文脈で交わる中で徐々に成長していると感じられる。

A子の場合、1年生の時のお手紙ごっこから書くことに慣れていき、それをかべ新聞で広げようと考えたが、その根っこには「書きたい! 伝えたい!」と思うような体験、生活がある。また、自分の記事を発表する活動を取り入れたことで「自分のことが認められる!」という自信が付き、また学習する意欲に結びついているようである。

自分から人にかかわるのが苦手なA子だが認められる心地よさを実感して、人と交わる、人に気持ちを伝える場面が増えてきているように思う。同様に他の生徒たちもかべ新聞作りが定着してきて「○○について書きたい!」と言ったり、発表の時間には声かけしなくても集まっていたりと伝える楽しさを味わっている。

また、A子がわからないときに友だちからヒントを得た場面から、あらためて彼女が一

生懸命文章を書こうとして情報を集めていたことがわかる。教師からではなく友だちからヒントを得たことは集団で学習するメリットのひとつと考えられる。友だちから学ぶことはわかるための大事なポイントであり、このような場面を教師が意図して設定していきたいと思った。

かべ新聞作りを繰り返し学習すること、昼休みの発表をいれたことで活動がわかり、意欲も十分な彼女であるが、文章を書けば脱字や平仮名がまだ多いという課題は残っている。もっと細かい部分でどうわかるようにしていけばいいのか模索中である。

(竹内 君江)

## 事例 5 国語・数学「分ける活動から片づけ活動へ」

### (1) 生徒の実態

本グループは、1年生2名、2年生1名、3年生1名の計4名で構成されており、担当教師は2名である。このグループは授業を始めるにあたり、教室に生徒を集めることに時間を要する。教師1名が教室で生徒を見るために残り、もう1名が他の生徒を集める体制をとっているが、集めているうちに教室から生徒が出歩き教師がついて行く。すると教室が無人になってしまったりする。いざ授業が始まっても教室のベランダの水道で水遊びをする生徒や、広いグラウンドへかけていき自転車に乗り始める生徒、別の教室「憩いの部屋」で音楽を聴き始める生徒が出てきて、教室には生徒が1名か2名ということもしばしばである。しかし、繰り返し行ってきた学習には見通しをもち落ち着いて取り組む生徒や、ギター伴奏による「歌」が聞こえた途端に教室に来る生徒、「歌」に合わせて大きくリズム良く体を動かす生徒もいる。その日の体調や気分によって活動に対する生徒の姿勢が大きく違うこともこのグループの特徴である。

### (2) 教材観

本グループの生徒の保護者や担任の願いには「落ち着いて学校生活を送ってほしい」「穏やかに過ごしてほしい」などが多い。この願いを受けて本グループでは、「生徒が物や人とかわかり、そこに教師と一緒に活動することで互いにコミュニケーションとっていく」ことをねらいとした。

そこで生徒が見通しがもて、集中しやすいように「歌」や「分ける」活動、「片づけ」活動、「遊び」などのいろいろな活動を組み立てて授業を構成している。「歌」は授業の始まりの合図として行うとともに、生徒が思いきり体を動かしたりリズムをとったり、気持ちを開放し学習に入りやすい雰囲気作りのため取り入れている。野菜や果物の実物や絵カード、文字カードを「分け



「洗剤いれた」